

40.左半側空間無視患者における視覚情報の有無が 頸部の回旋角度に及ぼす影響

海部忍^{1),2)}、沖田学^{1),3)}、山手千里⁴⁾、三笠洋明⁵⁾、椛秀人⁶⁾

¹⁾ 高知大学大学院医学系研究科神経機能学専攻、²⁾ 鴨島病院リハビリテーション部、

³⁾ 愛宕病院リハビリテーション科、⁴⁾ 日本大学大学院総合科学研究科生命科学専攻、

⁵⁾ 徳島大学医学部教育支援センター、⁶⁾ 高知大学医学部生理学講座

[はじめに]

右半球損傷を呈すると高頻度に出現する症状として左半側空間無視が挙げられる。左半側空間無視患者は、視覚情報に対して強く反応し、日常生活場面において顔面が常時右側を向いている状態が認められる。そこで今回、左半側空間無視患者に左側空間へ頸部を回旋するよう求めた際、視覚情報の有無が頸部の回旋角度に影響を及ぼすのか検討した。

[対象および方法]

対象は左半側空間無視を有する左片麻痺患者 12 名である。対象者全員に机上検査および日常生活場面において左半側空間無視を認めた。対象者には車いす座位姿勢にて、検者の口頭指示（「〇〇さん、左を向ってください」）に伴い自動運動で左側を向くよう求め、その時の頸部回旋角度を計測した（以下：指示有り）。検者は対象者の右・正面・左の 3 方向において 2 m 離れた位置から口頭指示を行った。また、口頭指示のない状態では頸部の回旋角度に視覚情報が影響しているのか検討するため口頭指示を与えない状態（以下：指示無し）の頸部回旋角度も計測した。頸部の回旋角度の計測には日本整形外科学会にて定められている「関節可動域の測定および表示」に基づき計測を行った。これらの実験を開眼条件下（以下：開眼）とアイマスクを使用した閉眼条件下（以下：閉眼）にて、外部からの刺激をできるだけ少なくした個室で実施した。分析は指示無しおよび指示有りの 3 方向における開眼の頸部回旋角度と閉眼の頸部回旋角度を t 検定にて統計処理を行い有意水準は 5%未満とした。なお、対象者には本研究に関する説明を紙面と口頭にて行い、理解と同意を得た。

[結果]

指示有りの 3 方向では開眼の頸部回旋角度と閉眼の頸部回旋角度に有意な差は認められなかった。しかし、指示無しにおいて開眼の頸部回旋角度と閉眼の頸部回旋角度に有意な差 ($p < 0.05$) が認められた。

[考察]

左半側空間無視患者は開眼時に視線および顔面が右空間を向いている事が多い。しかし、視覚情報を遮断した閉眼下では顔面が正中化した対象者が多かったことから左半側空間無視患者は体性感覚を基に生成される身体イメージの正中性は保たれている可能性が示唆された。